

## 2016 年度長安学プロジェクト研究成果報告

原 瑠 美

本成果報告は、2017年1月から2月にかけて学習院大学にて計3回開かれた特別講演会の報告を収録したものである。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアの歴史都市と自然環境—先端科学が拓く「古都・長安学」」（代表：鶴間和幸・文学部教授，通称「長安学プロジェクト」）の研究交流の一環として、2017年1月18日（水）に『学習院大学・慶北大学校 連携特別講演会』，1月20日（金）に『東アジア史特別講演会—中国古代の災害と環境—』，2月21日（火）に『東アジア史特別講演会—中国渭河流域の水利環境の変遷—』と題する特別講演会をそれぞれ開催した。

2016年度の特別講演会では、とりわけ歴史教育や歴史地理を主要テーマとして、韓国・中国から招聘した計4名の研究者に講演を行っていただいた。各講演会の概要は以下のとおりである。

第1回：『学習院大学・慶北大学校 連携特別講演会』

兪得順氏（韓国・大邱外国語高等学校 教師／慶北大学校一般大学院社会教育科歴史教育専攻博士課程修了）

題目「歴史の授業に有用な資料としての歴史映画」

兪氏は、歴史教育を専攻とする立場から、「歴史映画」が歴史の授業を理解するための有用な資料となりうるかどうかを、「歴史映画」の分析と、生徒たちへのアンケート結果をもとに考察し、実際に映画の一部を上映しながら報告された。コメンテーターには、兪得順氏の恩師にあたる慶北大学校師範大学歴史教育科教授の李文基氏をお迎えし、出席した学部生たちも含めて活発な質疑応答が交わされた。

第2回：『東アジア史特別講演会—中国古代の災害と環境—』

夏炎氏（南開大学歴史学院・中国社会史研究中心 副教授）

題目：「テキストの中の災害史—『泗州大水記』と貞元八年水害との異なる風景—」

村松弘一氏（学習院大学東洋文化研究所 客員研究員）

「漢代における災害救済の変化と環境」

夏氏は、魏晋南北朝～隋唐時代の制度史・社会史・生活環境史を専門とされ、本報告では呂周任の『泗州大水記』を題材に唐代の災害対応体制の実態を明らかにしようと試みられた。同時報告の村松氏は、漢代における災害救済状況と自然環境に焦点を当てており、両報告を通して、漢代から唐代に至るまでの長期的スパンから、災害における古代王朝の対策状況とその変遷をみることができた。

第3回：『東アジア史特別講演会—中国渭河流域の水利環境の変遷—』

費傑氏（復旦大学中国歴史地理研究所 副教授）

題目「過去2000年間の渭河平原における塩湖の変遷」

高昇栄氏（陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究院 助理研究員）

題目「関中地区の用水制度の変遷と環境との関係」

費氏は、環境科学専攻という立場から、中国渭河平原に塩湖は存在したのか、またそれら塩湖はどのような変遷を辿ったのかについて報告され、高氏は歴史環境史の視点から、関中の灌漑用水制度について前漢から明清時代にかけて、その権力機構や監督体制を含めて論じた。どちらも通史的に中国の水利環境とその問題を理解できる報告となった。またコメンテーターとして、鶴間和幸氏（学習院大学教授）が「関中平原における水利事業—鄭白渠と成国渠—」、また村松弘一氏が「関中における灌漑と塩池」というタイトルで、報告に対するコメントを行った。

前年度に引き続き、慶北大学校・復旦大学・陝西師範大学の3校に加え、新たに南開大学からも研究者を招聘し、古代都市とその周辺環境の関係について深い考察に基づいた研究交流の場を持つことができた。また、歴史教育という面で、文献資料に加え、現在の映像資料もどのように活用できるか新たな視点が加えられたことも取り上げるべき点である。

「長安学プロジェクト」も4年を終え、1年を残すのみとなった。古都・長安をめぐる環境の調査・研究に関しては、東海大学情報技術センターと引き続き共同研究を進めており、リモートセンシングの技術に基づいた連雲港の現地調査を行っている。陝西省考古研究院と共同研究を行っている、DNA鑑定を用いて考古科学的に中国古代王朝の馬匹生産を復元・分析を行う研究についても、この度調査報告が提出されている。復旦大学・陝西師範大学との学術交流を発端とする本プロジェクトが、さらに規模を拡大する形で講演会として開催でき、成果報告を掲載できることは喜びである。

（はら るみ 国際研究教育機構 PD 共同研究員）